

第3章 流山市の歴史文化の特徴

1 流山市の歴史文化の特徴

流山市の歴史文化の特徴は、市内を流れる江戸川や利根運河、坂川、大堀川等による水の恵みを利用して発展してきたことです。旧石器時代から戦国時代までは台地と谷津が複雑に入り組んだ台地上が生活の場として利用されてきました。江戸時代中期から明治・大正になると、江戸川や運河に河岸が設けられ、自然堤防上にまちができて、物流の中心として栄えます。一方、台地上は馬の放牧地や農地として利用されてきました。その後、鉄道や道路が交通手段の中心になると、新たな住宅団地や流山インターチェンジ周辺には物流倉庫ができました。

このような長い時間の移り変わりの中で、生活の場所は移り変わってきましたが、下総台地の西端に位置する流山市の立地条件の特性から、旧石器時代より今日まで、東北、北関東、東関東、南関東と様々な地域の生活・文化を受け入れてきた場所であり、水・人・モノの結節点ともいえる場所です。様々な地域の生活・文化を受け入れてきたこの地は、豊かな歴史文化が生まれ、そして守り伝えられてきました。

流山の地は、水の恵み、人の交流、モノが交わる文化の地と言えます。水・人・モノが交わる流山市の歴史文化は下図で示すように6つの特徴があります。

① 台地と谷津の恵みが生んだ人々の暮らし

<主な関連する文化財>

上新宿貝塚 上貝塚貝塚 三輪野山貝塚

東深井古墳群

東深井古墳群出土埴輪

三輪野山貝塚ヒスイ加工関連遺物

② 矢木からはじまる流山の中世

<主な関連する文化財>

旧長福寺愛染明王坐像 熊野神社

思井堀ノ内遺跡 前ヶ崎城跡

吉野家文書 芳野家文書

思井・芝崎・前ヶ崎の斜面林と谷津

③馬から人へ 開墾と開発 小金牧の営み

<主な関連する文化財>

諏訪神社本殿・幣殿・拝殿

松ヶ丘野馬土手 岩本大明神

オランダ観音 オランダさま

須賀家・岡田家・鎗木家・恩田家文書

④みりんや水運で栄えた流山本町

<主な関連する文化財>

流山の味淋醸造用具 赤城神社本殿

秋元家住宅土蔵 一茶双樹記念館

大しめ縄行事 流山小学校

⑤水の恵みと自然 利根運河

<主な関連する文化財>

旧割烹新川屋本館 利根運河

舟形神輿 利根運河大師

利根運河ビリケンさん

理窓会記念公園 眺望の丘

⑥豊かな農耕神事 いのりとまつり

<主な関連する文化財>

安蒜家板碑 諏訪神社本殿・幣殿・拝殿

市内各所寺社 大しめ縄行事

ヂンガラ餅行事 おびしゃ行事

仏像 絵馬 石造物

2 流山市の歴史文化 6つの特徴

台地と谷津の恵みが生んだ人々の暮らし

台地と谷津が入り組んだ地形は、住みやすい土地であったため、旧石器時代から多くの人々が生活の場としてきました。その痕跡が、遺跡として残されてきました。近年の都市開発に伴う発掘調査によって、当時の暮らしが明らかとなってきています。縄文時代には、温暖化によって流山周辺まで海が入りこんでおり、様々な魚や貝等をとっていたことを貝塚から知ることができます。

人々は台地を住居の場、谷津を水源や水田等として利用していました。台地と谷津が入り組んだ地形の台地には、多くの遺跡が確認されており、古くから住みやすい場所であったことを証明しています。

矢木からはじまる流山の中世

流山で最も古く確認できる地名は、香取市にある香取神宮文書にかかれた「矢木」です。記録では文永年間（1264～1275）に矢木郷と書かれ、地頭矢木式部太

夫胤家という人物が支配していました。矢木（八木）の地名は、思井熊野神社にあった8本の椎の木から始まった説や8つの村（思井村・中村・芝崎村・古間木村・後平井村・前平井村・加村・西平井村）で構成されていたためとも言われています。

矢木（八木）地区では、流山市と松戸市の境を流れる坂川に接する台地上に中世の城跡や寺院が残っています。戦国時代には、古河公方足利氏と下総の千葉氏との領地争いの場となり、合戦の記録が確認できます。さらに中世末から近世・近代の古文書類も多く残されており、当時の村の様子を知ることができる貴重な史料です。

鎌倉時代にはじまる矢木（八木）は、遺跡や石造物、古文書の記録によって、鎌倉・室町・戦国・織豊・江戸・明治・大正・昭和と人々の痕跡をたどることができる地区です。

馬から人へ 開墾と開発 小金牧の営み

江戸時代、東武野田線の沿線や JR 常磐線の南柏駅付近の台地上は、幕府の馬の放牧地「小金牧」が広がっていました。周辺の村は、牧の中の馬や林の管理を担うと共に、馬が自分たちの村に進入しないように野馬土手を築きます。経済活動が活発化していく中で、牧の中を開墾し、新しい村をつくる動きが見られ、市内では、向小金新田、十太夫新田、駒木新田、青田新田、初石新田等の村が誕生します。これらの村々は、小金牧と共存しながら耕地を開墾していきます。

明治時代になり、牧が廃止されると、豊四季・十余二村等（現：柏市）の開墾村が誕生しますが、市内の牧場であった場所には松や櫛等の林が残りました。これらの地は、昭和30年代になると江戸川台・初石・松ヶ丘の住宅団地が造成され、平成には流山おおたかの森駅周辺の区画整理が行われます。

小金牧の放牧地は、江戸時代の新田開発によって流山市と柏市境を複雑にし、昭和30年代以降の首都圏のベットタウンとしての住宅開発の場となったのです。

みりんや水運で栄えた流山本町

江戸時代、徳川幕府により江戸川が開削され、舟運による物流が活発になると、加・流山に河岸が設けられ、物流の中心地として発展します。江戸川沿いの微高

地には、宿・根郷・加岸の集落が形成され、「流山」の地名発祥の地とも言われる赤城神社をはじめ、多くの寺社が建立されました。流山本町は、船で江戸まで1日で行けること、原料の水と米に恵まれたことにより、江戸時代中期から醸造業が活発となります。そして江戸時代後期には醸造業を営んでいた5代秋元三左衛門と2代堀切紋次郎が「白みりん」を開発します。「白みりん」は江戸の食文化に欠かせないものとして人気を博し、流山はみりんの産地として大いに発展します。

田中藩の御用河岸として、また醸造業の発展により物流の中心地となっていた流山本町は、明治になると葛飾県や印旛県の県庁や裁判所、教員養成所の印旛官立学舎が設置されるなど行政の中心地になりました。明治6年(1873)には、千葉県が成立して、県庁は千葉に移りますが、物流の中心としての繁栄が続きました。

流山本町は、みりん工場や江戸・明治・大正期に建築された建造物が多く残り、白みりんや水運で栄えた町並みが当時の繁栄を物語っています。

水の恵みと自然 利根運河

江戸時代から利根川・江戸川は水運の大動脈の役割を担っていました。

しかしながら、上流からの土砂の堆積や濁水により船の航行が困難になることがしばしば発生しました。このため江戸時代には、利根川沿いの木下(現印西市)や布佐(現我孫子市)、布施(現柏市)、三ツ堀(現野田市)の河岸から江戸川沿いの流山や加岸等の河岸まで陸路によって荷物を輸送することが行われていました。この濁水による船の航行ができない状況を改善するために計画されたのが、利根運河です。明治23年(1890)に開通した利根運河は銚子から関宿を廻り、東京までのルート短縮をすることができ、蒸気船や高瀬舟等多くの船が行き交いました。

ところが、物流の手段が船から鉄道へ変化し、度重なる洪水によって運河を管理する会社の経営が行き詰まり、わずか50年で物流を担った運河としての役割を終えました。

第2次大戦後は、利根運河は、利根川・江戸川の洪水対策の調整水路としての役割を担いました。利根運河両岸の堤防や運河に接する谷津や台地は、周辺の都

市開発が進む中で、植物・動物が生息しやすい環境が保全され、様々な貴重種が残る自然豊かな地域となり、市民の憩いの場所にもなっています。

明治時代に開削された利根運河は、近代土木遺産の象徴であるとともに、人と水と動植物が共存する場所となっています。

豊かな農耕神事 いのりとまつり

現在、医療技術の発達により日本人の平均寿命は80歳を大きく超えています。

第2次世界大戦以前の平均寿命は50歳未満だったので、この70年ほどで大きく変わりました。医療技術が発達する以前、人々は病気をはじめ、様々な災害に対して、神仏への信仰や祭りによって災いを防ごうとしていました。人々の「いのりとまつり」は江戸時代から現在まで形を少しずつ変えながら、受け継がれています。正月のおびしゃ行事、夏祭りや秋の収穫後に行われた秋祭りは、五穀豊穡や無病息災を願うもので、現在も市内各所で行われています。

市内各所に残る石造物や神社・寺院の祭礼は、地区の歴史文化を物語っています。